

「米国における教育と宗教」

ブルース・L・バートン

2006.1.24 放送

今回は、現代アメリカにおける宗教と教育の関係について話したいと思います。

アメリカという国は、外国といっても視聴者の皆様にとって、身近な存在といえるかも知れません。政治と言ひ、経済と言ひ、文化と言ひ、日本と米国は切っても切れない関係にあり、日本国内の至るところに米国の影響が見受けられます。日米間の人的交流も活発で、毎年百万単位もの日本人がアメリカを訪れています。皆様の中にも米国に行った経験のある方は多いのではないのでしょうか。

しかし両国のあいだにこれだけの人・モノ・情報が行き交っているにも関わらず、米国には日本にまだあまり知られていない、あるいは知られても日本人にとって理解しがたいことがあります。今回は、米国のそうした知られざる、日本人には理解し難いと思われるようなことを紹介したいと思います。それは、今米国の学校教育の中に潜り込もうとしている、英語でいう「インテリジェント・デザイン」、日本語に訳せば「知的設計論」という考え方についてです。

さて「インテリジェント・デザイン」、つまり「知的設計論」とは何のことでしょうか。簡単に言えば、知的設計論とは、ダーウィンの進化論を否定する考え方です。知的設計論の主な論点は、人間を含む生物は、その構造と言ひその機能と言ひ、あまりにも複雑でよくできているので、偶然の結果進化したのではなく、きっと何者かが意識的に創ったに違いない、という主張です。生物を設計したという者の正体については、知的設計論そのものの中では語られていませんが、支持者のほとんどがキリスト教の信者ですから、キリスト教の神を想定していると推察されます。旧約聖書の最初のところに、神が万物と人間を作ったという有名な話が載っていますが、こう考えると知的設計論は、宗教的な味を抑えながら旧約聖書の考え方を事実として現代風に言い換えたものとして理解して差し支えないでしょう。

では一体誰がこんな非科学的な説を信じるのでしょうか。驚くことに、実は多くのアメリカ人がこの説を支持しているのです。去年の10月にアメリカのCBSニュースがこの問題をめぐって世論調査を行ったところ、回答者の半数を上回る51%の人は神が人間をそのままの形で作ったと思うと答えました。人間が神の介入無しで進化によってできたと思えた人は僅か15%でした。大学を出た人に絞ると人間が進化によってできたと思う確率が若干高いのですが、それでも24%に過ぎませんでした。

さてこの知的設計論が否定しようとする進化論はご存知の通り、19世紀半ばにダーウィンとウォレスに提唱されたもので、その後、様々な修正を加えられながら、現在に至り、現代生物学の大黒柱と言っても過言ではありません。生命そのものの誕生や進化の細かいメカニズムが完全に解明されているとは言えないとしても、事実として生物の多様性や適応性は進化による産物だという理解は、科学界では当然の知識であり、疑う人は先ずいません。

しかしこのような理解は少なくともアメリカにおいては、一般人のあいだにはあまり普及していません。進化論はキリスト教文化に育つ一般のアメリカ人には受け入れ難いものであり、昔から抵抗が多いのです。

さて神が人間と万物を作ったという考え方は、元々「知的設計論」ではなく「クリエイショニズム」、つまり日本語で言う「天地創造説」という名前と呼ばれていました。その天地創造説が一躍有名になったのは、1925年のいわゆるスコープス裁判においてでした。この裁判において、聖書の教えに反する理論を公立学校で教えるはならないというテネシー州の法律に反して、進化論を教えた生物学教師・ジョン・スコープスが訴えられ、有罪となったことは日本でも知られています。

テネシー州において進化論を教えるはならないという法令は1967年になってやっと廃止されましたが、天地創造説そのものは他の州でも根強く、学校教育の中に進化論だけではなく天地創造説も教えるべきだという議論は絶えませんでした。

1987年になって米国の最高裁判所は、やっと、アメリカ合衆国憲法の修正第一条を根拠に、公立学校は宗教的な目的で天地創造説を教えることが憲法に反する、つまり違憲であるという画期的な判定を下しました。これで少なくとも学校教育からは天地創造説は消えるはずでしたが、支持者たちは諦めが悪く、今度は同じ考え方を「知的設計論」という新しい名前で持ち出しました。「知的設計」というわざと分かりにくい名前を使うことによって、宗教的な意味合いを薄めて87年の最高裁判所の判決を避けて通れるだろうという考えのようです。

このように生まれ変わった天地創造説つまり知的設計論は、最初にフィリップ・ジョンソンというカリフォルニア大学の元教授に提唱され、その後シアトルにあるディスカバリー研究所というキリスト教系のシンクタンクなどの活動によりアメリカ国民の間に普及してきました。最近では、カンザス州やペンシルバニア州などにおいて地方自治体の教育委員会にも取り上げられ、学校教育の中にその姿を現そうとしています。

知的設計論の支持者たちの主張は、進化論が正しいとは限らないので、その真否をめぐる議論を子供たちに教えるべきだというものです。もちろん科学界では議論も何も無いの

ですが、多様性や自由を重んじるアメリカ人は、子どもたちに様々な考え方や選択肢を教
えて最終的に本人たちの判断に任せようというやり方に非常に弱いのです。ブッシュ大統
領でさえも、去年の 8 月の記者会見に意見を求められたところ、子供たちに進化論と知的
設計論の両方を教えるべきだと答えました。

ごく最近の出来事ですが、実は先ほど触れたペンシルバニア州においては知的設計論を
教えるべきだとした町の教育委員会に対する裁判は、つい去年末に判決が下され、教育委
員会の主張が裁判官によって全面的に却下されました。しかし、依然として半数以上のア
メリカ人が、人間の誕生をめぐる聖書の教えを事実として考えているという現実をみると、
アメリカで知的設計論をめぐる議論が決着するには、まだまだ時間がかかるものと思われ
ます。

私自身はキリスト教文化の中に生まれ育った者で宗教そのものを批判するつもりは毛頭
ありませんが、21 世紀にもなって科学大国・アメリカにおいて聖書に書かれた神話が国民
の支持を得て、学校教育の中にも潜り込もうとしているということは、同じ米国人として
啞然とするとともに自国の将来に対して危惧を抱いてしまいます。さて日本におられる視
聴者の皆様は、アメリカのこの知的設計論をめぐる議論をどのように感じられるでしょ
うか。

それでは。